

「子どもの誕生」再考(4)

——子どもの構築論の更新に向けて——

明治学院大学 元森絵里子

1. 目的

アリエス『〈子ども〉の誕生』が邦訳されて40年近く経ち、「子ども」に関する保護と教育（「可愛がり」と「激昂」）という感覚が普遍的なものではないというテーゼは一般教養となっている。しかし、子ども期の「誕生」ないし歴史的・社会的「構築」とは何かについて、どこまで真剣に考えられただろうか。もちろん、アリエス自身が「誕生」とまで呼べる画期を描こうとしたのか、単に複数の変動を記述したのか自体に留保が必要であろう。本報告は、この曖昧な「誕生」仮説の曖昧な受容がもたらした問題を指摘したうえで、より現実的な記述の枠組みの必要性を述べるものである。なお本報告は、昨年度大会で連携報告（「子どもの誕生」再考(1)(2)(3)）を行った際に、フロアより統一的な視角の提示を要請されたことに対し、中間報告的に応答することを狙いとしている。

2. 方法

まず、先行研究の検討として、「誕生」「構築」仮説の受容が、言説や構築をめぐる社会科学的議論を等閑視したことにより、ある一枚岩の理念が実態化・制度化したり、上中流層から下層へ広がったりといった、一枚岩的・単線的な図式を生みがちとなった点を指摘する。さらに、規律権力批判や学校化社会批判といった政治的議論や、前近代へのノスタルジーに終始しやすく、批判の立脚点自体の歴史性や構築性を見えなくしてしまうという倫理的な問題にも触れる。そのうえで、子ども期・子ども観の複数性という解に行きついた欧州子ども史・子ども社会学を検討する。これらの準備作業を踏まえて、昨年度報告内容を含む、歴史社会学的視座に基づいてなされた報告者らの具体的な事例を紹介しながら、ある種の感覚が近代的諸制度のなかに制度化され強固になった側面と、多様で複数的な感覚が雑多に混在する現実とを両立させる枠組みが必要であることを論じる。事例としては、児童虐待防止法制定（1933）前後の児童労働や捨て子・貰い子問題、戦時期の勤労動員や学童集団疎開、戦後期の浮浪児や里子問題などを取り上げる。

3. 結果

ある観念の社会的構築と、そこから零れ落ちる外部の関係は、前者が後者を駆逐していく過程ではない。むしろ両者は同時成立である。発見されてしまった後者をやり過ごす技法なども生まれ、結果として零れ落ちる世界が不可視化されたりもする。

4. 結論

「子どもの誕生」とは、このような一連の局所の歴史の絡まりとして描き直されていくべきではないだろうか。この終わりなきプロジェクトを共有していくために、例えば、J. ドンズロの「線」と「複合体」と「逃走線」といった枠組みなどが感受概念として有効であろう。

参考文献

プラウト, A. 2005=2017『これからの子ども社会学——生物・技術・社会のネットワークとての子ども』（元森絵里子訳）新曜社
元森絵里子・南出和余・高橋靖幸編（近刊）『子どもへの視角——これからの子ども社会研究（仮）』新曜社